刀劍問荅

伊勢貞丈

848
83

ガラス使用

848
83

刀剣問答

ガラス使用

帝國圖書館藏

刀劔問答

目録

御劔
糸巻乃太刀
白太刀
平鞘のた刀
陽乃太刀
つりひた刀
さしひた刀
金覆輪
猿皮のた刀
鞘巻乃太刀
黒た刀
銀劔
衛府のた刀
陣乃た刀
くさきた刀
野た刀
いか物作
清ろし

昭和十四.四.
今井俊太郎氏寄贈本
鶚軒文庫
国立国会図書館　タイトル『刀剣問答』　請求記号 848-83
ガラス使用

太刀の鞘袋
京の下の帯ハ
たくわくの帯とり
打刀ハ燧袋付る
太刀ハ帯とり付る
白さやまき
えひさやまきもの
こし刀
刀
さやまき柄やう
鞘ハ黒漆柄ハ鮫

かんとうハ帯とり
京ハおひとり
尾さや
太刀ハ
鞘巻の刀
志ほかつとさやまき
さうまき
總の物
ちいさ刀
鞘を柄を巻
小刀うらかい

下緒もとひ織
下緒の色
打刀
腰さし
上総忠光ハ打刀
脇差ハ下緒緒ハ緒
大小の名目
当腰差をと云
刃引
葵鍔
蝶鍔

もときめ下緒
刀ハ火打袋付る
はし刀
小打刀
腰差小尻尾くとる
わきさしの刀
守刀
刀脇差師の名
鎌倉下備ハ下緒
漆鍔

ガラス使用

追加

かんとうの帯とり
かひえ寸法
刀さし帯
ゆきゝ鞘巻
両つゝの刀
毛抜拵乃たち
錦包太刀
うんせ鞘
葬送儀式刀柄鞘絹袋入

以上

追考

たちの帯とり
たち緒の寸法
太刀柄糸の色
たち添袋付事
革包たち
丸鞘太刀
やゝ緒
たち緒神〻ニ納
二重下緒

帝国図書館蔵

刀剱問答

一 上古にハ剱とのミ申しかバ問記に刀剱ともみえ候ハ、是も前後に候や

答 問記ニ云方家ハ剱と有ハ前後にてハ無之、往の法たちのことにて老人の佩たちを剱と申事ニ候、家りにては又公家ニ勅授（ジュ）常剱と申事は是ハ文官迄て武役にしなき官人ハたちを佩ざる事なれども作法あれども納言によりて天子より随身兵仗てたちをたまはりてハ常剱と申せしも前後にてたちまた常のたちにては

一○ 鞘巻のたちと申ハいかゝ

ガラス使用

○さめ巻の太刀と云ハ何者ハ無しさや巻の刀と云也答
これハ後世糸巻の太刀を鮫巻の太刀と云ひならはし
甚誤り也

（糸ニテ巻ヲ糸巻ト云革ニテマクヲ革巻ト云鞘巻ハ太刀ト云刀ト云並太刀ハ武士の太刀之鞘巻ハ刀也今世糸巻たる刀ヲさや巻と云も誤也鞘巻とは只鞘刀之刀今世糸巻太刀ヲ後の太刀と云モあやまり也太刀ニ後何ハ無之ナリ）

一 糸巻の太刀といふハ
糸巻の太刀ハ今こそ世に鮫巻の太刀といふものゝやうにいふと
まへの太刀と云るハ本式の太刀の柄をハ糸にて巻たる
ものなし又甚ゝ帯せられて太刀も皆ともに〱柄を巻
事なし古来より帯し白太刀と申も柄
を巻たる事なし鞘巻の太刀ハ軍陣に帯して
太刀ならバ柄を巻つゝ名を鞘巻といふ也柄をまくことハ
なきゆゑなり巻也依て糸巻の太刀也

中ハ古足利公方の糸巻の佩太刀に何れも鮫に入れ
赤うるしも黒きも有し柄ハ緑糸なる巻かなるも有りなん
皇目貫丸の目と柄を巻付ても有りて合也誤なり
さんし又巻巻糸とんぼ貫もあり帯取にて付
同の所ハかんしうりにて色もいろ〱振も縁りありしより
宗五一冊（宗五記伊勢下総守貞親の作）ふんどしもあり又家々にも伝りなる
小鳥丸の太刀の装束ハ應仁年中造りしと申傳へあるに
其節あつく常足なりあり柄さめやしも花文地の蜀紅の錦
をうすて纏ひたるとて草かゝ葉の糸にて柄を巻たるよし
里巻をもしてあつくの物ひより金付より誤ハ革
つかハ足なりにて全後編有せつかなる足なりなるも

もゞきハ金もくらき銀にて中ハ金の八重菊の彫物
あり目貫ハ金の三鈷之足おこなわれき是を〇の太刀
の称なり

伊勢守貞孝答書云名太刀ハサヤ黒ヌリ金具赤銅ツカハサメく目貫家紋ツカふ巻足アヒヲ黒革ニテヌヒクヽムナリオヒトリハヒキメ革ニテハト見エ帯元の足間アクル所ヲ黒皮ニテツヽミ縫クヽムヲ云

一 黒太刀と申ハいかゞ

○ 黒太刀と申ハ黒く塗たる也宗五一冊ニ云黒太刀として鞘ぬり
かしらつかさめ掛けて黒くぬる金具ハ赤銅にてかけ彫
物ハ彫なるものたるへし目貫我家の紋をやき付にすへし
帯元ハ菖蒲革にしてあひそくもまじへ是を黒太刀と云

一 白太刀とやいふハいかん

宗五一冊ニツカ銀ノキサメトアリ

○ 白太刀と云ハ銀作也古ハ銀作の物をハ皆白と申ス黒よ白太刀
白とあるも銀作のことなりと云宗五一冊白太刀として注されたるハ
白くしたる也是もさやを鮫の皮付けるとも云也世外のことハ
黒太刀に准して表裏とりてハ金具ハ皆銀なり是も
帯元ハ菖蒲革なり貞衛云（貞衛ハ貞丈ヨリ六代前）帯元足あひの
所白き唐物にて作也云々白き唐物とハ白き地の金襴にて
帯元の足あひにあてる所を包み縫くゝむなと云也古ハ武正
の時ハ大かたひろく上品の物を用ひて兵なり
手附ハ目貫ハ白太刀にて佛ハ黒太刀をと持せし
よし宗五一冊にみえたり

一 銀銅拵の太刀の事大的の出み有て銀銅とハ如何

○ 銀銅と云ハ白太刀のこと也銀銅とかきて白太刀とよむ也

一 平鞘の太刀と申ハ如何

ガラス使用

○宗五一冊ニ云平鞘にて蒔絵のしき持せまて沃懸
一段結構成金作にて　太刀も似合ず拵へく
何れの公家も分際にて平鞘をは古寿老也と云是今世
にて衛府の太刀と申なりしたる物にて又毛抜形の
太刀とも革緒の太刀とも云太刀名ハ衛府の野剣（ノタチ）とも也
つくハ白鮫をかけ魚をかけさせ目貫ハ毛抜形にて柄也
柄鮫皮革又は藍革などの緒を付緒共ありの金物を
入緒の先ハ細もく先ぶとく少しとおりて金物をつけ
る是鞘を赤銅と云鞘ハ鴬嘴又ハ沃懸もとむきて衛府
たとも也又沃懸（イカケ）地にして衛府太刀にして青貝（アヲガヒ）人にて紀
やりたる也太刀は衛府螺鈿の野剱とも云是ハ大臣の
大将将軍なとの持せらるゝ太刀也　蒔絵品々を略し

一衛府の太刀と申ハ如何

○右の平鞘の太刀なるをもて衛とは近衛兵衛尉の事也
府とは近衛兵衛尉の官の人の役所也衛府の官の人
の帯せる太刀なれハ衛府の太刀と云

一陽の太刀と申ハ如何

○陽の太刀と云名目古くよりなし今とても公家方にはなし只
近来武家にて申し出す事の名目にて衛府太刀を略
と云ならして略して云を略也衛府の太刀を略して衛府の
似（ヤ）タリ（ウト云ニ）太刀と云を略也ときをんの陽の太刀と
云なる也

ガラス使用

一 陰のたちとは申は如何

○陰乃太刀の名目も古はなし 今も武家には一向なきことなり 是も近来武家にて申出せし也 衛府たちを陽のたちといひ 相違して陽のたちに向ひては陰乃たちとも云として 糸巻乃たち（今云サヤ巻たちや）を差して陰のたちといひならはしたるなり

一 つかひたちとは申は如何

○是は従者のものゝ常に差したるたち也 今よりたちとは粗物也 是も古きつかひたちはなよやかなる刀をたちめかして粗相にこしらへたるものゝ 鞘は金焼付（ヤキツケナリ）也 柄鮫もなき故 四つかひに金唐梅のたちと云 先の金具もなきぬは非也と

ツカヒ太刀ト云ハ
應仁ノ乱後貧ニ
成テヨリ使太
刀ハ初リタルヽ
使ヒモノニスル
太刀トイフ事ヽ
伊勢貞丈文カ
私刀記ニツカサヤ
ヲ只一ト刷毛ヌリ
テ常ニハ縄ヲ巻ミ
フクリシハ箔ヲ押スト
見エ

一 たまきたちとは申は如何

○つゝみたちは鞘してまきたる也 ふるくあみたるものを云也 揃ふるく たちと云詞也 よのしかりぬことなり

一 さげたちとは申は如何

○是は役目の附発度の事に紐してたちをさげたるを して手ぬひのつけものつかせずして 提たちの總名とて おぬいあしらひふくたちを提たる也

一 野太刀とは申は如何

○野太刀に二品あり 一つは兼而に申名家に用ひ平鞘のたち也 是は野剣とも云て 野太刀とも云也 二つは軍陣に用る長く 一名は太刀と云 長具足とは 長刀 野太刀 従のありて云 事大同小異なり 貞衡云 野太刀ハ長サ五六尺

して母の字中子の字同しほとかけてあこの字もほそ
りの様よわく長原にしてひしと巻柄もなし鞘を
なし蒲生いなりもまきしと云事て太刀に際くと有しほと
云し是は家に其儀をも存せし女房達也太刀に
よくふ錺ゐておつ足緒ゐていつそくにかけて脊に負ふ
て出るなり

一（貞丈云古代中ニ兵庫寮ト云役所アリシ之武具ヲ造リテ納メオカル之モ蔵ヲ兵庫ト云之其兵庫寮ニテ武具ノ奉行スル役人ヲ兵庫頭兵庫助ナド云之其兵庫寮ニ甲冑刀剣を納めスベテ）
兵庫鎖の太刀とハいかに

貞衡云兵庫鎖ハ軍陣なとに帯しりあるく
太刀なれは鎖帯にしたる也之二帯をしほとの帯
是いかにしと云るも鎖帯にてきしとは緒の二帯に打通
しるし是は兵庫寮よりぬかしたる也細鍛の内尻

（武具ヲ作ル職人ヲ召置テ武具ヲ作ラシムル之兵庫鎖ノ太刀モ兵庫ニテ作リタルナリ兵庫ニテ作ルハ上手ニテ細工宜キユヘ賞翫シテ兵庫クサリトヨビタル之シカルユヘ兵庫ニテ作ラヌヲモ細工宜キヲバ兵庫クサリト云之）
渡辺綱か源家より兵庫くさりの太刀を給りしも
うつしに千鳥の柄鞘ともに小鎖のかけ身也柄のかしらを
也総体かね条巻の太刀なとくさり御令あり是をかね
三所物目ぬき家の紋鐔ちもあつかすそとう大将金
をもし鎖也太刀鐔ときのものいかし鞘也鞘は望ゆゑまきに小尻
の方まて金をもつてかね二三所よあり是の所も鎖之くさり
筆の出ならはくさりを鎖にて花ひしの紋所にて有馬
の家の花形のつかね出しをおとしはんをつけ
くさりに鎖のくさり一所にて甘きは鎖のくさりの帯
兵をある是の鎖はふくしして梅田もちおもしき
くさりに九つして小き輪也帯しはり先に菖蒲革なと

つぎ付ることハ鐔ハむかしより物ニ有れ結へきしあみ
華をと付たる鞘のさめのうへに家の紋を毛彫にせる蒔絵ハ
七子之又先年桐の白檀なる神の宝物にある類
胡つの兵庫鐔の太刀を見んとするまても太刀の小
小太刀迄ハさやに源家の紋毎を入ふられしけれハふ
志つり帯とりの鐔の先に華を付ともし年久
しくて切もせる物なれハ今に鶴社に残る杉胡つ
の兵庫くさりの鞘紋入たるにいふに太刀にも少遠ひあり
然の法の鹿さやにけしる辨也こまにハ兵庫鐔にハあ経
でいか物作りのなかけり

一　いか物作りの太刀とやらんハ如何

○いか物作りも兵庫鐔に似て廿後迄何り続何め中り象とみあふ
太刀にいか物作りの少さるりたれハ七乃世ニも是銀をしぞ
鹿の法の鹿さやにけて足ハ兵庫くさりに七足（ツシ）之柄乃
甲金も奈の太刀より甲のるきなり武者の时鐙
云々兵庫くさりに七足之といふ兵庫鐔のごとく銀のく
さりを付るをいふ也七足とにいふ足に鐔をも七の脇に付る
事を云也後在宗の物作り古系をみんせよしにみ
第乃柄とやなに銀のみ付なり甲金物とも
御金行り中にえて廣き志あるねのり目ぬきハ家乃
紋也柄にみ完る銀の鐔をませし鐔のゞてぬきや
そくりのしかもく先き物と人金をも家紋に付るやい

並庫造のごとし是の外も同しきもんありさるん山造も

七所拵ハ付て物ひきりれど常ハ造ふ何しと

菖蒲革あり

一 腰差の大刀と申ものゝ在之哉

○ 太平記ニ南都の衆徒ハ面々ニ腰差の大刀を帯し用意

したりてとあるハ此腰差の大刀と申ハ如何

○ 腰差の大刀と云物ハ大小寸の刀両把の尺度にて候

其ニ腰差と大刀と二色にてあるもあり腰差の下ニの

字ニ有しやうかたニ富士ののゝ字入たる差を腰差やまり

あて下書やとは

一 小太刀と申ハ如何

○ 小太刀中半太刀と云事旧記ニハみえそれハなし脇差之

サーくハ七種のより各々名目ニての有しハ他りねのより

各自後みてハ其しハ此ニ大刀刀の寸ニ人ニとの

大小刀の造縮みうの事ニいる定ちる寸法ハ無之

事ニ云あハ小太刀いれを中半太刀と定

とみなるみしゝハ名ニ別る其の小きニ小太刀中位

なるの中半太刀と云ふあるハしかるべし

（平家物語ナキ花人ノ事陣太刀ハ小太刀と陣太刀をき陣太刀ハ金作の小太刀を持て陣僧ハ小太刀を帯して陣太刀と云也行家ノ事を合せてたの字なる小太刀ニ装束の（くつ）ハ陣太刀とこしらへんしハ殊ニ右よりのききあハせく一時ニを致ひくる）

一 中半太刀と申ハ如何

○ 右ニ云ふりしハ心得可有（セトモ云）

一 陣太刀しと申ハ如何

○ 本人の陣太刀を陣法のりしと云ふ大刀ハそのしからぬまで

なる故ハえらしといふ也たとへハちや傳をしといふに
物をし隠るしハ浴てうし也たとへ己か古道をいふなり
るハゑかくらせし物なるゆゑハ用ゆしと云ふ同し
一 太刀のさや鍔中ハ今のひきそぎのやうにしてや又ハ
鮫さやのやうにしたるものゆ
○ さや袋ハひきこをさめて鮫ざやのやうにしてハ太刀の
つふ藤かけてつゝかく縫つけて其のうへ目貫をも
巫つゝ糸ひきくなりかのうちへをしめと藤の
目ぬきありてあり鍔とかね金のやうり藤をそのけく
つゝかいてめひくしてもとにわさりをよりて足を
なる也我家に傳ハる小烏丸の太刀の鍔ハ古のさゝし覚ハ

應仁年中比より世中傳也千代に鞘袋といひしものの
此様を以て知へし家三一冊に三方緒のは太刀にさや
袋入よある無る也但さや袋ハ糸まきの太刀と平の
あるなり白太刀足太刀平鞘のとゐハなき也
一 かんとうの帯と申ハ如何
○ かんとうの帯と申ハ古へ唐より渡る織物の名
にてなる物を以て帯に用ひし故帯とハ太刀の
緒にて候是ふて太刀をつきし故帯とかなり
一 雪の下の帯と申ハ如何
○ 是も唐より渡る織物の名也帯に云ふそうたまひて用申候
一 常紫帯と申ハ如何

ガラス使用

○あしきの帯を添て用ひし

一たくひの帯をいふ也

○嫁木と云ハなりきをつひてしとよむなりけり法さき

といふ鳥鮪にてうはつきたるあらめこしく白き

紫まえきの緒をもつての糸をさせてまつくみ組候ひ

平き緒也打刀のさ緒のことし是を帯ともいふ也

一履さめとなきて毛皮の袋を太刀の鞘にきせし

ものゝ名なり何度（本式にあり）

○太刀羽に逢へはいひる虎の尾を誂へ鶴尾

鞘をさする鮫鞘の皮むかきの行縢

豪従僕のいふよへて毛皮を用ゐる足利殿の御代より

虎豹の皮ハ将軍家右近衛大将にあらされハ不用之由の

皮ハ弾正の官の人ならてハ不用候也鮫鞘も毛皮

なり（

今水口ニテ草ノクキヲ組テツクルナリ

弦袋ト云ハ弦巻ノ事也近世別ニ弦ナトツツミテ袋ヲ縫テ弦袋ト名付ケ用ル八誤ナリ

一太刀に弦袋を付る事有之弦袋と申ハ如何付候哉

○弦袋ハ弓の弦を巻き置たる物也革にて縫のせく物をと

しては南方に鞆ちを付て巻ある弦のくつきぬ猿飛

ゆへる物也革の紐ありて弦の端を継合せて足掛にて

添付ハ東わるへまひかりなと〆て置之ハ弦

袋ハ足形の所に付るも弦袋ハ軍陣の所付也（狩来の時ハ常に旅人）

一太刀ゆゑ纔に紐ふり

○太刀をたの紐にてつなきあてて柄にみの足の帯よりさい

常へよりも下へ出して手緒を足とする一ツ出して後へ
出す也下より一の足の常ニてハ常へよりも下へ引廻して前へ
出して細前後の常よりも両合て太の緒にて結ひ留
わなにして軍陣のときハ結ひあまりを二所のごとく
結てくゝりをかくるよけぬ様ニ常ニして冶ハ緒ハ
ふる也（[illegible]）

一　太刀ハ常よりも結ひ付る也帯取也

○　たくみ此常ニハ鞘を上へ出して結ひかけて結ひ留る
布の如くハよりにて結ひかけてわるくなる
みちを一トたくみを[illegible]してよく
る也と四花（花駒并）みつくんよりハ人の緒[illegible]世[illegible]

日本紀ニ蒐頭羅佐波摩根トアリ上古ハ藁ヲ以テ太刀ノ柄鞘ヲ纏漆ヲ以テ上ヲ塗ル今ノ鞘纏ノ躰ト神武紀ニ見エタリ蔵人ヲトシ画ニモサヤマキノ鞘ニ藁ヲ以テ巻タル如ノ手サシノ目付ル体ニアガキタリ藁ヲ以テ巻キタル体ニ似ルユヘサヤマキト云也

一説ハ是ヲ差シテ下緒ニテサヤヲ巻立サヤマキトイフトモイヘリ

ありし又帯緒の結ひやう世にあるにもやうなり

一　鞘巻の刀といふハ

○　さやまきの刀一腰名の如くにてさうさう鞘刀とも糸の
物にもかくるなとも小刀とも申也ともなくある人もなき世に
持おくの物の結ひ書るハ結ひて鞘をハ長サ七寸也
内寸斗とあり柄のハ糸をも革をもさうして紋をさせて
たるし目貫も又唐木にて柄をしてきぬをさき世ぬ
ものハ赤木の柄なりと云ハ世事也鐺をうつ事
みゆ鞘ハきさゝめをつけるも小刀かうかひとさしてき
下緒を付ル小志つるもをハけるも切るもいかし人の武士ち
まことの纏の附もかくるぬ緒の時も幻なる丈夫[illegible]也

ガラス使用

サヤヲキザミ巻タヲ付ルユヱサヤマキト云フ説モアルベシ

今も猿楽の狂言に古の大名なとの形をまねて素襖を着てこしに目貫の短き刀をさす、さや巻の刀也、猿楽の者は風俗を改めすして昔を守るゆへ鞘巻の刀と名付るなり、当世も刀をぬきて差かんと思ふ時短刀なる故わきさしは鞘のまゝ帯よりぬけて出るやう也、後世刀をさしては大傷をば常に上より紙にて鞘を一まきまきして一むすひしてこじりを留るなり、如此せしはぬくる時は鞘は帯にとまる也、鞘をさきて葛（ツヅラ）にてまきたる作なりしてぬる也

一　白鞘巻とは平家物語なとに見えたる事也、白柄のものなるを

○常の中に白とは銀作りの事にて白太刀と同じごとし、柄さやともに銀の事也（付）神銀作りなるさや也

一　忍ひかたなの鞘巻とは明徳記（太平記）なとにも見えたり

○柄頭を忍ひのいくさの具にも用ゆるなるべし

一　えびさやとも申なり

○柄も鞘も海老のからのごとくきざみ付けて朱塗にする也、小尻の所海老の様にかたどりて尾の形をきざむ也、からとある所は小尻なり、からとあるは尾の形に穴をあけて短き革緒を通して猿手の緒なりこともいひたる也、大まねきとも云ひ、さるての類也、かくあるの方は海老のこし二重に好まいかしとし

ガラス使用

柄には太刀のごとくかぶとがねあり小刀かうがいはさしたる事
常の鞘巻のごとし下緒はひきあゐ革（カハ）なり犬まねきの
緒のあまりの端は鋳させて切る也鞘并記に海老
ざやなどには必ひきはだ下緒を付るひざや老ざやはしかね
どもこゝの時は必ひきはだ下緒を付るとあり義氣
胡長の鞘巻の異名をらんしては右のふとひざやなどなり
是らは犬まねきも下緒も藍革を用らるゝもあり

一　さうまきと申は如何

○　さうまきと申もさや巻の事也さや巻と云詞略して
さうまきと云也左右巻と云はあやまり也鞘巻とは云也
てさうまきとよむべし

一　腰刀と申は如何

○　是はさや巻の事也鞘巻の刀は常に腰をはなさぬ刀
なる故に腰刀といふ也又世にいかなる人の上にも腰刀
鞘巻をば子物の様に心得るは誤なり

一　腰の物とは如何

○　腰の物と云も腰刀と云も同じ事也鞘巻の事也常に
腰をはなさぬ故の名也又太刀打刀などは当世常に帯せん
供に持せる物也鞘巻は朝暮腰をはなさぬ物也然るにこし
の物腰刀などといふ時はまぎれもなき也鞘巻の事也

一　刀と申は惣名也物の惣名也今は短をさしていへば長き刀
を刀と申は旧記に刀と書しは今の刀の事には無之候

○同祝の刀進上刀持所刀とかくあるしハ皆鞘巻の刀也其中にてハ美々敷刀とあるをも略してハ同じ事にて今刀と云物なれハいかしへちうらハ刀とも脇刀ともいふ也

一ちいさ刀と申ハ何ぞ

○ちいさ刀といふも鞘巻の事也是をちいさ刀と云ハ打刀にくらぶる名也打刀ハ尺も長し鞘巻ハ短しされハちいさ刀と云也昔万松院殿義晴公の代に恵雲院殿へ（光源院殿義輝公）御乃事ちいさ刀を上へて参らせられつる例により今の近衛殿にハちいさ刀御進候也世にちいさ刀も鞘巻の事也今世にちいさ刀と云ものハ打刀の形也古のちいさ刀とハ別なり

一鞘巻に様々有や如何

○宗五一冊に云あげまき刀ハ近制禁にてハなくともいかにもたる金刀と申へきそといひし折ふしに形つくりたる金にてハたらぬ昔ハ鞘つくりたるハ金銀にて中身鞘をぬきかうらい小刀はかり金なとハいれさせたるハ金刀たるへくハつらうちさめ（金のかうかいかみさめのてくつなとうたいふなとも）さやのつけ（さやを金にて包むもの）又金にてぬきかうぐいまて金なるハ中身ハ古ふ成たるにハいかにもへいさやうなる刀をハさしたる人ハさんれ我を式ハ小女房（若き女房なとの也）うしとさしけし唐本鞘かいかさがやなとハ若き衆もさされ候もとされも為中にてハ若衆中にハいましめ柄さめ又あいさめなとつけ申たる衆多ある人ハさされけし又

国立国会図書館　タイトル『刀剣問答』　請求記号 848-83　ガラス使用

近頃ハ御腰物にハぬりさやしつかハこしらへ[illegible]
ふちかしらつかハ同前其外を見てぬきまいめを入つかの口金
ちらき同前也御目貫ハ丸の内に法桐焼付御かうかい共に
とうみハ焼付又色のたねにハめぬきのことくなる桐を
焼付此桐八ツあり御かうかい小さきを二三寸ほとおきて金にて
そぎつぎよつぐ也御小刀つか金くらんあり又つかさや
都ハ地金を志やくどう鍔かうかいめぬき共のごとし
又かうやくさやのもやうし又普賢院殿（義教）冨士
御参詣の時御下向の時させられハ御腰物おき具に獅子もりそう
御同二腰あり小尻柄なとに獅子もりそう柄頭石
たゝみ金を貝にて入まはす一段も少も長くつみは大概

御腰物九寸余もり候てはいくつも有之其外志やくどう
作りあるハ御さげ緒ハ菜の糸又ハ紅に菜にて一寸
ほどつゝみ亀のかうかい其まゝも御俵石唐紅の
御さげ緒ハ又其外又若人おこなひ地ハいつ
かけ地の刀もさされ此の付うちあるは近年人
の御さし此おはに若不中小さ刀房をひとしくてさ
さし此つをもつて貞親（伊勢守）教訓書（長禄年中の書なり）也刀
の作に御若みて云ふるまひ事もある九寸斗の刀
上代より其近代のとよみやりは世ぬきは長さは定
也一人八寸斗能云々

一 鞘巻のつかをともおさへ此外

ガラス使用

○本式ハ柄まかぬ事なれとも軍陣にハ巻也東山殿御代
より常に柄をまかせられし人ありけるとなん
中にも宗五一冊に刀の柄ハ京にても華にても巻たる
陣中にての事なりと有り上下の時つかまきたる刀
さゝぬ事なしと云々 又伊勢供古実記（伊勢備中守貞宗の作也）小刀の
柄まきたるハ遠乗の時さし又常にまかれぬ事也
鮫の事ハ当代の事也又云大かたハしらの時さし
しらんとある刀ハさやまきにても中身も同前とぞ
鍔をもさや巻あしくハ中身ハ御式の刀たるへし
かつらの死同ハさや巻の儀主人にさやまき
あるてハ叶ふまじくと云々 御式の刀とハ柄まき

あるはふるき代につかまきたるも多かりしとなんきこえけり

一 鞘巻の柄軍陣にハ巻もなし然れとも忠度最期
の白銀作みえたり 刀ハ赤木の柄に白金の胴金(ドウカ子)
巻しも也九郎判官義経の鞘巻に付し刀ハ花(クハ)
櫚木(リボク)の柄に角巻入たる刀なりし由源平盛衰記
記にみえたり昔ハ戦場なれバと柄巻たるを専好

○軍陣にハとつかまきたりしてさま〳〵なりとハ人々の好みによる
一 軍陣にハ皆柄巻也本式といふにハ何とそ
柄巻けハ手にたまり有てよろしき故利用の為に巻
なりよりてしても叶ぬよしと云也しかし

一 鞘巻に小刀かうかいさしたる何の為にて候哉

ガラス使用

緒を通し此文ハ
〈通〉首の事なり
俗の貫ハ鞐を結
結ひてトツツケ
の緒を通し
鐺手ニ付る

彫物の一家と世ニ
称せる後藤の家
の定目有りしの
彫物多ハ笄斗
ニて小刀の柄ハ少
なし

○刀ニさしそへ小刀をハさしそへとも申候宗五一冊毛利四記ニ
さしそへたり刀ニそへる小刀といふ也小刀ハ常ニハ紙
なと切もたち菓子なとを食ふときハ皮なとをも
むきこまかにして用ニもたつへき為也鞐緒ニて
鞁の首をとりて付小刀ニ縄を付計ニて其の
口より切口の方へあつけを通し此ニ通しとも申前ニ
記しあり小刀の柄ニくさんを付けたるハそくらん
ニ縄を通し通さぬ為也又くりんなきもあり夫レハ常
の時斗用る為ニ作りたるなり文ならてき小刀の柄の
尻の方ニ穴をあけつるもなし是も縄を通したる
き為の穴也又笄ハ鞐かきとなす也鞐の中の穴ニ
き付鞐をもつき鞐のちけをもなてはくへきる
ニ也於乃方ニ耳つきあり耳をもつくへき為也
かりかいハ鉄ニて作しも赤銅ニて作るも有りを
うふりやかくもかつてつかハかうかいとおしまけて
かうき所をとげてかく目きる為ニ赤銅ニて
作り初しまけらるき後ニ出来る物也秋毛別ニこしと
なる目ひかいてたき物也

一後の物の下緒結ハ如何

○酬答記（伊勢かゝる貞丈翁ノ記）ニ云下緒結ふる人のきる物故
花とるめく定りて一むすひ結ひ刀ハ上の方へ
むすひめ此あるやうニ結ひ刀のさやニかゝりて下へ

さかり年まてよきさかりの

一　ひきこめ下緒と申ハ如何

○いわく下々にて成時ハ必ひきこめ下緒也又ひきこめまきと

申も打よるゆ前にても記とも御云ひきこめ下緒ハ

ひきこめ草の下緒也定くゆりたる草の赤く

わらびてのやうなる形なれ共字同也と云

一　下緒の色ハ何とて年式と候らん

○答并記と云下緒の色ハ定る法なし　法大名儀

記（記者小笠原大雙紙の事也）ニ云紫の下緒の色紅浅黄緑なと

ニ若紫門跡なとハ用捨の事も是之ひハ萬の事ハ

公方様御用ニ承事にて此このこと斟酌也但其ニ及ひまてハ

乃以ち萬も二若云て紫門記ニ云下緒の色ハ

いつまても用ひ候ゆへ人のふ所ひ用ひ候事又ハ

斟酌ハ候も下緒又白金なる也のことハ玉梅まて

ニ及ひ二若ハ沢山寸法のこと刀ニ合候ようき

緒ハ作らゝのこと長下緒も寸法の様ハ也

一　刀ハ火打袋付けるハ如何

○火打袋は何の為ニ候ハ火打袋ハ火打ちの石

入れ候也又今る袋也薬なとも入る也火打ちを持る

旅行なとの為也大刀にも火打袋付けるのあり

大刀ニ火打袋付る事ハ日本式乃まるより始也

火打袋ハ織物なとにて作りて六七寸計ニ縫へく

切て裏を付縫てめぐりに糸にてかゞりをさして
緒を色にして引しむれハ袋のごとくなる也是を不
定なり刀につくる故にくり方の目に結ひ付る也結緒
ハ式なし太刀にハ一の足の下に結付へし宗五一冊
に云火打袋ハ四十以後さぐる但若も晴のよそほひハ斟
酌あるべし緒ハ大かたなるにわろし是あるよし宗祇記
入候べくよしかきたる也武雑記（伊勢貞孝の記なり）に云
御前にハ晴の時ハ火打袋さげ候ハす若き人にあるまし
く候四十以後ハ案内申上に不及さげ可申候但若
きハ案内入へき人ハ案内申上さげ候ハゞ
よろし正月御事始記（伊勢貞久の記也）に云刀を人にあづくる
時自然火打袋さげ申候時ハ左にて膝中に仕るへしと
とあり袋とも品々あるに及はしるさし

一 打刀と申ハ如何

○ 打刀ハ今の刀と替て長き刀なる也さや巻ハ
人をさし通す刀也打刀ハ人を打切る刀なる故
打刀と云也古きよの武士ハ今の世の様に脇差と打刀
をさしたる事なし自分ハさや巻の刀をさし
太刀をハ供に持せし也近年ある人の出に今の
刀ハ古の打刀に似たる事をとてあやまりなるへし
今の刀ハ古の打刀なり

一 つぢ刀と申ハ如何

○宗五一冊に云打刀とハつば刀とも云也云々さや巻
の刀ハ鍔なし打刀にハつばあり故鍔刀とも云也
一上総乃五郎左衛門尉大草ハ懐に持つる打刀ハ一尺八寸
りと東鑑にみえ候此打刀ハ長短く候此時代の打刀と
今の刀とハ別物とおもはるゝ也
○大草懐中しけるも今の刀も打刀にてハ平物にてな
きくらハ大草の鞘とるの中にかくさんためにわざと短き
打刀を用ひたるにてハ寸尺ハ短くとも柄を
長くせしゆへ鍔ありけるに打刀にてハなく小刀かつうハ
なさしたるとも打刀の作りにしたる打刀也當代にも記ス
ことく短刀刀に定る尺八寸にて用る也短きを

論せるハあやまりなり
一小打刀とハ如何
○打刀は短くても大刀に云ならず大草の打刀なとハ小打刀とも
此前に記する小打刀同じことにて候
一振鞘とハ如何古よりあることにや
○古振しといふハ今あひくちと云物也長サ六七寸
ばかり柄さやともに唐木などにして柄をも鞘をも
目ぬき也又鍔なしの如く柄にさめきせてさやをうるしも
ぬりたるもあり当世ハ丸くなる下緒ハ短くなる也
是ハ用心のために懐中に隠して振の方にさしたる風振鞘
と云也貞観政要書云（長振年中の事なり）当世ある人さかんなるに

ガラス使用

脇差といひてさすも是は隠釼とて人にかくしてさすなど
こそあり候業なとにては假令人の見ぬ所にさしたる
もよし人にみえ付しまゝてつゝは上へ對しいかなる野心の
あるぞといはれては曲事たるへし短刀を用へきとあるは
軍陣物まうで旅行なとの時に假令たきさへ中る
小者なとは供しるゝ也仁ある者（ジン　人のまき）のまきさしと
云せてさすと云いかなる手とりも覚えたる由代とや
人のふるまひ如きは下労になる様代の若者なく
さしを持たる也大目附若に云短刀のより隠釼と
人にかくさる程に自然さされぬは殿中なと人にゆるさぬ
候さしかまへるにては云こ書札雑々聞書（伊勢守被官人河村誓真入道記也）

に云かうふ（宮仕のうち）時短刀さすと人かくして隠釼とも懐劍
若はさもあらはたらぬへはさしはつまし也扨假令なと
短刀箱之ことく今時短刀といふものは尺にもたらぬ
小刀のやうに柄なとを縁をつけて鞘ところのうるみ
出してさしたる古のわきさしとは大きなる違也これよりの
丸きさ下はいま古の短刀のやうなし

一　短刀のこしらえは丸くして縫き下緒を付るは柄の元
めしたる

○　右の記をみるに古の短刀は懐中に差物也
に角いふては腰にかゝはらぬきさし頬にしきまるに
古志ゆきぬも丸くし物也又縫き下緒の端に結ひ

玉むとゆるゝ下緒を無用とせらるゝ事乃ろふにいさゝを
あるへきしるし也腰差の鞘中より抜へきぶり出へき故
留ん為に下緒を付しそへて置也今此世のわ
きさしを昔の腰差よりも長き故小尻まはく
下緒短きなり

一　腰差の下緒結様の事
○故実記云腰差は結目の下へさくるゝなかよしち
ぐへやうは刀と同前也

一　腰差の刀と申は如何
○只腰差の事也鞘中にて腰差にさせて刀なる由を腰差に
刀といふ字を略して腰差しと云也たとへは鞘巻此
刀といふ字を略してさや巻と斗いへはたかへし此
も刀と云事を略して腰差と斗云に紛る
らしのさらといふ字を略して済ましと斗
いふなるへし

一　腰差と打刀とさして太刀と云名目古も有しなり
○今はわきさしと打刀とさしそれを大小と云如し
へい名やうの事なし前には腰差をぬく古の武士は皆に
鞘巻をさして打刀と云事なし足利殿の末乃
代に至て鞘巻の柄巻を取わきさしと云る腰差
を鞘巻の代りにさしぬ其の風俗になりたるとも打
刀をさし添るなりけりしなり就る大小と云

国立国会図書館　タイトル『刀剣問答』　請求記号 848-83　ガラス使用

名目古ハあかりしなり　腰刀打刀なとハ供の者ニ持せし也　宗五一冊ニ馬の先へハ小者打刀持たるニたるへし　又云弓袋もたせて打刀とつゞいて右ニ書へし　又云私の歩行出仕以下ハ腰刀二振持くるゝハ此様ことそ故殿ニ金仙寺（故殿ハ伊勢守貞親　金仙寺ハ伊勢守貞宗）なとハつねハ腰刀打刀も刀より外ハ持せてまいらせられし也　是を以て打刀ハ供ニ持せらるゝ也知へし　今の風俗のやうく大小をさすと云事　天正文禄以来戦国の時より始て武家風の今ニ傳りし掟なるへし

一　腰刀とハ如何

○　腰刀とて別の作様もなし　即古のさすが也　今此詞ニて中さすハ合口也（あひくちと云ハ鍔無き也）腰刀帯せぬ人ニ云處也　女房衆小児なとハ中なる刀を用る也　小児の側ニ置て魔障なと退くる為しおく也　懐中して不慮の用心の為ニ帯る刀なり　懐中するゆへこしらへを丸くもする也　其製至て細ニいまた有し人ニも知りける時宮中其外冠り落さまくていとさわかしくして冠とりてかゝりても腰刀よりかゝりハぬきものく紫宸殿ニひしとさゝの案詮也（一条禅閤兼良公作）ニあるそうり今の懐中ニハ小刀をさゝせし作古ハかうかのなとはしける也　小刀ハ其戦場ニ用る物也　腰刀懐中せる猶の人つねニハ小刀ハ用なりかたかハ

一　は不用なる事なれかはりめはちやうさと也
ちり刀にこしらへたるちり拵と称するなとちり刀と
ゆゐは也

○服差も本名はわきさしの名也されしはちり刀とはやつかな
織めんは第めりやうしく刀と云は及物の惣名にては

一　刀脇差の柄鞘ホの師の名古今の名替り事しると
なくしはなり

○古今替りもの有て古こしらへと今こしらへと云は今の頃ち
と云こしらへも今と云は柄の拵りしにあるなり也古つの
くちとも呼ひしを今はこひくちと云鞘の
くちと云は柄の金物の口なるをいひし（古ノ刀ツバナキ故ツカトサヤト直ニ合也）くち
かねと云はさやの口の金物也ふちかねと云は鞘の
ふちなれは也又古のこいくちといひしを今は上はきて
きと云物を今と云はさやの口へ入るなり古ちやうき
かねちりきしとも云しを今はわきさしと云ちやうき
きと云は人の足のくびやうのことも刀のそてきり
足ぬきやもんをまもるとてくびなる名付る也古くり
うとといひしは紫の形ぬ似るる也古きそろえね
ねびうねてひいしをいはさるつのと云をかうねと
ふは柄へする金物なれは也ねびうるを云は常ふ
かけて刀ちと前へ落さぬ為なるは也古はつるかけとも
さめたと云今はさめと斗云古そのことをいひしを今は

なかごといふ上古には魚の事をなかごといひしとかや
のはらごのごとくなる故なかごと申也魚子とも
書てなかごとよむ也古き目安といふは目釘
の事也目といふはあなの事也穴をつめたる故目安と
いふ也古くは目釘の頭に鳥獣草花などの形を作り
付て目釘穴をさして今一方より留めて作りける
物をあてゝ何事かなき墨を目ぬきと云今は目ぬき
をいへるなり上の方に付て別に目釘といふ物の故
作りて穴にさす也古へは太く遠きなる也

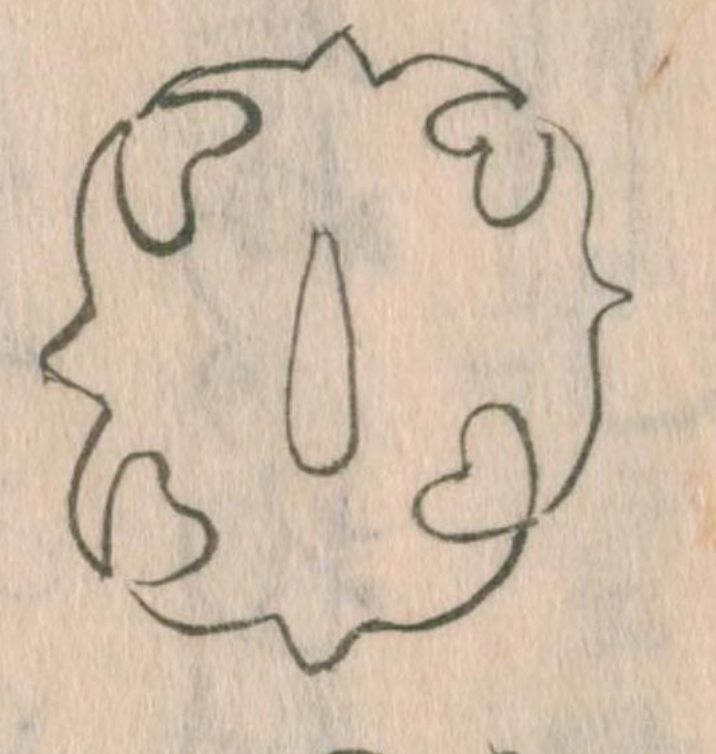
一 足利殿の御代まで荒くひきをさし古刀をさしき
中ゆるしをひきと申すめ

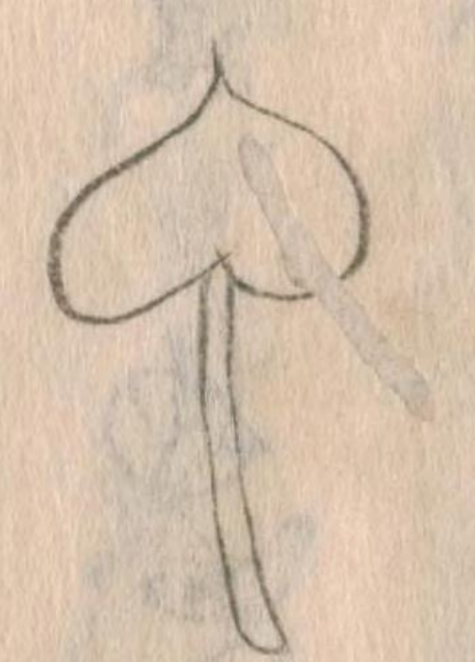
○ そひきといふは鉄にて木刀をこしらへ黒くぬりて鞘をさし
さぬやうにかりし是人の宅にて郷きたる物也其元祖教實と云もの
きをそふうるしぬりて大刀の柄のやうにこしらへ
差てさしたる物柄糸を打て色をもよく結ふて三条五郎
まで以上はつぶれにして面白きひめの名残に此ありし
法其のなきにもなき心にそへられし　又云宗満よりの候ふ
そひきは慶翁にし給ふそのまゝの下かたへさしたる故
いひ由緒て申伝へたる故其後の事にし候て　飯川
能登守の物語にし　年老たる人にそひきさしたりし
に若くして　又云高橋殿様周防守より御上洛の
かつ出し候田村清親後拝にし老者に新作来の

武士各々交て示法未流諸にて混乱し度覚候ゆへ
鐔等ニ至り取て形状ふ至り迄を精て吉撰せられ鐔師
に役人を定めしひきいは堀細にて候と云者を以て老まで
をひきいは古は廿八九年迄も人目ふ見えずなり物也文きつ
なふさもてなりおてさるべき也統いなをひきいふ
そうなる物也なをひきいはすぎ力ならぬなをひきと云是流
ら御蔵の附又は能附指物者世蔵役たる役なり
候しをひきなまし吉身めとするき鉄瓶を持つて
是流旅愛ふしんとんとうり

一　鎌倉古流と申は如何成物の古流にて候や
○　かまくら古流といふは昔の古流のことをいふて一方の
鐔のわかちを付る物なり布袋流と云世ふかんとんなり宗
五一冊ふ出古流と云は此事也

一　あふひ鐔と申は如何成形の鐔にて候や
○　葵といふ葉の象を四ツ寄せ合たる形にしてあふひ葉
とし加茂葵とも云葉也葵鐔は太刀つばに多く用也


あふひつば此形


あふひの葉

一　志とき鐔と申は如何成のつばにて候や
○　粢の字を志とぎとよむ志ときは粉餅にて（粉ヲコ子テ作リタル餅也）粉餅のかたちの如く
本草綱目ニ時珍曰單糯粉者曰粢ト有リ單糯とハうるち米を交へず糯米計りをこねて作りたる餅也是を粢と云也

丸手縒の事なれハ今時丸き紐也（長シ細シ）石屏（コツモチ）とハいふを
同意なるへし

一 ねり縒とハ如何

○ ねり華の縒なるへし 練華ハ縒なも用ひ申さいぬ華乃
よみね ねり物を合せてよりたる物也

追加

一 かんとうの物ひらりもかんとう今も始まる裂（キレ）の世界のやり
何をも大事ある今のさんとある縞の作ある物也 今繍
織ある物の也 たて繍は格子も有 色はふうえ業事して其
繍ふときは 縄をも有 世界に洋 ぬると云物也 今代の荷業色

より綴るせいふもとよふ物かんとうの類也

一 太刀の帯とりかんとう畠の下布ふたつわくの外は無也

○ 蜷川記云 帯取の事 かんとう糸にて物也 但しまき
そくかうどんを太刀一分の作様物くけてもしも申候

一 物ひとりの寸法如何

○ 蜷川記云 帯とりの丈は此事 太刀二たけなりしとる
つゝ寄より法をまて折也と也

一 下緒の寸法如何

○ 蜷川記云 下緒の寸法同色の事 是も寸法なしとも
云ふ ゆの色にても若狭装はかふ有ると
中に有もの（私ニ曰人々手ニテ一ヒロニテヨシ）

ガラス使用

まちハ待也
町の字をかくハ
誤也皆かゝす
こしらへ置買人を
待なりといふ心
あるべき也と云

一　刀さしとは常にさしといふか袴の紐にさしとや

○袴の紐にさしとは[illegible]なと云刀（帯せぬノコト）さしとは常に帯する
袴の前のこしの事也常にさしとは也云を前こし
の紐にさしをいふなり

一　太刀のつか巻も糸の色何色を本式にするやいかや

○何色を本とも定法なし[illegible]と云太刀也つか足
あるすて糸色は糸のまゝ何色も定なり

一　まちさやまきとはいかに

○鞘切りか（鞘を切るには鞘巻作り　よる職人の名なり）鞘巻のさやをいくつも作り
置て買ふ人の刀にあはするさやを売ても也
かねて作り置て買ふ人を待けれはまちさや巻といふ也

よき人はまちさや巻は求ぬ也まちさや巻は多く拵
をくなり依而職人とも店居の亭に
残しはまちさやをのやまとものゝ
ぬる人のこゝぬ者としてつゐせん
とよあり屋とはやふちちかなり
此一帖武人の問ゐによりて覚悟の程也記しおく
おくる者也

追考

一　太刀に猿緒付る事軍陣にハ弓持つ程の人ハ皆付る也
公家の記録年中行事の絵本にみえたり武家にも有之

敍爵（従五位下と いふなり）したる者ハ常に装束を付る也 太平記に青侍なる出仕の時ハ小さや巻の刀をさし赤き刀を持せたるが叙爵の後ハ供に太刀に浅黄を付たりとありしはいかなるにや（赤さや巻ハ赤き刀と云 従者にて太刀のさやをもとらんとせしにて赤地めく）常に云也

一 雪柄の刀といふハ総刀にさめをかけず唐木などにて柄をつくり 又其上を雪といふ 柄にさめなくて塗物のみなるをもいふ 鮫ハ魚の皮也 魚を鬼と云ふちくらたる也 依て鮫をかけぬをば雪といふ様歟 源兼良記に 清雪ノ刀をさしけれ也とみえたり

一 革包の太刀 文明日記（親元日記）文明十三年七月廿九日の条 革裹太刀進上のよしありけり 革包（皮裹文革ともいふ 裹同じ事也）ハ鞘をかし革にて包み 紐にて巻ひとしきたる太刀なり 柄ハ鮫をかけて黒くぬりたるにて上にあり わりもあり也（若狭国霊応山革包の太刀右のごとく神宮寺に蔵）那須与一宗高ハ太刀今も那須の家に伝へてあり 革包也 熱田なるこしらへにて 皮のうへに文付子のやうなる切にて金銀をかけたり 文安元年八月朔日皮裹の太刀進上あり 康富記（大外記中原康富ノ記）にみえたり

一 長伏輪の太刀とハ常に伏輪の太刀ハ勿論伏輪ある鞘を こゝにの方にもよせ鞘先まで

あり（前のよせハこじりの方のもちやうなり）又の方ニさハ引鞘の出る様なり（さしハ引かへの事也とちらへなり）長伏縁ハ笠引事のよせをもく通し而見せといふ

一 丸鞘の小刀（鍔さやとも云）といふハ小刀のさやを丸くしたるにハあらずして一角の口をとも云古代ニ金作りの丸鞘の小刀とそ金作小刀のさやまで金ニて包をたるをも云なり一角ニさやをも金ニてもつれとりたる也（柄をもさやをも金ニて包ミたるを金作りニかざる／とも作るを一粒ニ包をハ丸さやといふべし）

一 鮫包の小刀といふハ鮫の鞘袋にかけたる也前をも云ところ柄鞘ともニ錦をかけ際く縫て柄糸をまきわたり巻をもとるる也 錦包の小刀といふ名

目ら法集ニ（小笠原長秀乃記なり）見えたり

一 下鞘（又掟鞘とも云）といふハ剃髪の者帯する物なり形守刀のごとくニて柄鞘共ニ作り柄の前の中ニさる環入れさやにも二所金物をさや口の下ニ金物ニ穴二所あり此穴ニ緒を通し緒〆を入て此手袋作てさけるなり 右の緒〆を緒ニ入て〆てさける故ニさけ鞘といふなりとも職人共云合緒ニ制規の者かけたる辨ありとそ古乗物ニ師家入道の掟鞘をさげたる事見えたり

一 つか巻鞘といふハ鞘刀のさやニもきざミ紋をかけて鞘尻のきハ一寸斗おきて本末ニ作り出して鐺も小切る也

縫目ハ手の内ニ何事も是ニ極る也さやくりかさのきハまく
入るともさらしして刀とつんてある事なりしてされは短
刀也又さぬのさ祭折ハなり西位和家の記ニ
流し（社）海つきもの（祭）をあらハして（晴）あるをも（見）鞘乃
さきいちとりうけて（先）（折）（懸）猶るやたりかぞ
夫より妙ニかんてえなり

一 下緒神ニ不納とハ刀脇神へ奉納ありて納むるにハ
下緒をとき納むる之子細ハ下緒にてハ人を志ばる
ものなる由思ひけるゆへ神へハ納むる事古来伝ハ

一 葬礼乃法人係ノ刀柄鞘をも同色ニしるべし係乃下緒ハ
白絹ニて袋ニ入て袋といふハ鞘袋柄袋也白き絹をもて

せて縫たるもの也今世武家ニしハ此事なし将軍義
量公（長得院殿）薨御應永卅二年甲辰二月廿九日於等持
寺火葬乃とき記せし処（室町殿記ナリ）役人のとき
着白直垂也（結目紙捻）（ユヒンカウヨリツラシト見タリ）チヨハク刀鞘の袋ニ入ル

一 二重下緒とハ常の下緒のうへ也鎌倉下緒ニ對して
常の下緒を二重下緒と云なり家仁聞出ス二重
下緒とつけぬるなり

伊勢平藏貞丈

ガラス使用

848
83

文政十二己丑歳八月十七日写す
秋乃屋　源飛

ガラス使用

848
83

ガラス使用

ガラス使用